



Title	楚の遠祖陸終とその妻女嬪の伝説に関する一考察： 清華簡『楚居』を手がかりとして
Author(s)	徐, 少華
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 18-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔出土文献研究〕

楚の遠祖陸終とその妻女嬪の伝説に関する一考察

——清華簡『楚居』を手がかりとして

徐 少 華

（草野友子 訳）

する情報を用いて、関連する学術上の難解な問題を解決し、楚史・楚文化研究の進展を促したい。

一、陸終が娶つた女嬪の族属

清華大学が所蔵する戦国竹簡（清華簡）『楚居』は、二〇一〇年末に刊行されて以来^{注1)}、国内外の学術界において大きな注目を集めている。そのため、すでに多くの論文が各種期刊やインターネット上に発表されており^{注2)}、関連する問題についての深い認識と理解を推進した。しかし、古史が茫漠としていることにより、疑問点は甚だ多く、数多くの問題が詳細な研究や推敲、考古資料による実証を待つてゐる状態である。

本稿は、伝世文献とすでにある研究成果とを結合し、

伝世文献と出土文献とによると、楚国の王族は、祝融八姓の一人、季連の後裔であり、芈姓であるとされる。『史記』卷四〇・楚世家に次のように言う。

楚之先祖出自帝顓頊高陽。……高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重

黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後、復居火正、爲祝融。

吳回生陸終。陸終生子六人、坼剖而產焉。其長一曰昆吾。二曰參胡。三曰彭祖。四曰會人。五曰曹姓。六曰季連、莘姓、楚其後也。^(注3)

(楚の先祖は帝顓頊高陽より出づ。……高陽は称を生み、称は卷章を生み、卷章は重黎を生む。重黎は帝嚳高辛の為に火正に居り、甚だ功有りて、能く天下に光融し、帝嚳は命けて祝融と曰う。共工氏乱を作すや、帝嚳は重黎をして之を誅せしめ、しかもも尽さず。帝は乃ち庚寅の日を以て重黎を誅し、而して其の弟吳回を以て重黎の後と為し、復た火正に居り、祝融と為る。

吳回は陸終を生む。陸終は子六人を生み、坼剖して焉を産む。其の長する一を昆吾と曰う。二を參胡と曰う。三を彭祖と曰う。四を会人と曰う。五を曹姓と曰う。六を季連と曰い、莘姓なり、楚は其の後なり。）

明すると、主な内容はおおよそ誤りがない。たとえば、『左伝』僖公二十六年に「夔子不祀祝融與鬻熊、楚人讓之（夔子祝融と鬻熊とを祀らず、楚人之を讓む）」と、また「帥師滅夔、以夔子歸（師を帥いて夔を滅ぼし、夔子を以て帰る）」とあり、杜預注に「祝融、高辛氏之火正。楚之遠祖也。……夔楚之別封、故亦世紹其祀（祝融は、高辛氏の火正なり。楚の遠祖なり。……夔は、楚の別封、故に亦た世よ其の祀を紹ぐ）」とある。

二〇世紀の一九八〇年代に湖北省荊門市で出土した山楚簡のト筮祭榜簡には、「與梼楚先老僮・祝融・鬻熊、各一詳」とある。^(注4) 老僮が卷章であることによれば（詳細は後述）、簡文に見える三人の「楚先」の順序と名称は文献の記載と一致する。このことから、東周から秦漢時期に至るまで、人々は楚族の起源と展開について比較的よく知つており、関連文献の記載は基本的に信用できるものであることがわかる。

また、『大戴礼記』帝繫に、次のように言う。

この段の記載は、周代の楚人と太古の祝融集団との淵源關係について明言している。その間には伝説の色彩があるものの、関連する文献と考古資料によってこれを証及吳回。吳回氏產陸終。陸終氏娶於鬼方氏、鬼方氏

顓頊娶於滕氏、滕氏奔之子、謂之女祿氏、產老童。老童娶於竭水氏、竭水氏之子、謂之高絅氏、產重黎

之妹、謂之女墮氏、產六子、孕而不溺（育）、三年、啓其左脅、六人出焉。其一曰樊、是爲昆吾。其二曰惠連、是爲參胡。其三曰錢、是爲彭祖。其四曰萊（求）言、是爲云鄧人。其五曰安、是爲曹姓。其六曰季連、是爲半姓。……季連者、楚氏（是）也。^(注5)

（顓頊は滕氏に娶り、滕氏奔の子、之を女祿氏と謂い、老童を産む。老童は竭水氏に娶り、竭水氏の子、之を高綱氏と謂い、重黎及び呉回を産む。呉回氏は陸終を産む。陸終氏は鬼方氏に娶り、鬼方氏の妹、之を女墮氏と謂い、六子を産み、孕めども溺（育）せず、三年にして、其の左脅を啓き、六人出づ。其の一を樊と曰い、是を昆吾と爲す。其の二を惠連と曰い、是を參胡と爲す。其の三を錢と曰い、是を彭祖と爲す。其の四を萊（求）言と曰い、是を云鄧人と爲す。其の五を安と曰い、是を曹姓と爲す。其の六を季連と曰い、是を半姓と爲す。……季連なる者は、楚氏（是）なり。）

『大戴礼記』のこの段の話と先に引用した『史記』の記載とを比較すると、おおむね同じではあるが、細かい点が異なる。第一に、『大戴礼記』帝繫の内容はさらに詳細であり、顓頊・老童・陸終らの家系の姻戚関係の旧

族を示しているだけでなく、昆吾・參胡・彭祖らの人あるいは支系の名称も記載している。第二に、「老童」が「卷章」に代わっており、裴駟『史記集解』は徐廣を引いて「世本」云「老童生重黎及呉回」（『世本』は老童重黎及び呉回を生むと云う。）^(注6)と言いつて、また譙周を引いて「老童即卷章（老童は即ち卷章なり）」^(注7)と言つて、司馬貞『史記索隱』は「卷章名老童（卷章の名は老童なり）」^(注8)と言う。すなわち老童と卷章とは名・字あるいは号の関係に当たる。第三に、『大戴礼記』帝繫は顓頊と老童の間に「稱」の一代がなく、『世本』の記載は『大戴礼記』帝繫と同じであり^(注7)、これは記載に欠失があるのか、それともこれらの学者の太古の史実についての見解に違いがあるのかは不明である。

「女墮」については、『史記』楚世家の「陸終生子六人」の句の下に、司馬貞『史記索隱』と『太平御覽』は『世本』を引いて「女媧」に作り^(注8)、墮と媧とは通用し、ただ偏が異なるのみであることを明示している。

鬼方は、上古時期に北方において強大であった狄族であり、伝世文献・甲骨卜辞・銅器銘文にみな見え、学者たちの研究によると、それは媧姓の族、あるいは「媧姓の国」であるとされる^(注9)。媧姓の「媧」は、文献では多く「隗」を作り、また

「歸」に作る。『左伝』僖公二十三年に「狄人伐廬咎如、獲其二女叔隗・季隗、納諸公子（狄人 廬咎如を伐ち、其の二女叔隗・季隗を獲て、諸を公子に納る。）」と、その杜預注に「廬咎如、赤狄之別種也、隗姓（廬咎如は、赤狄の別種なり、隗姓なり。）」とある。また、『史記』卷三九・晋世家の「狄伐咎如」の句の下に、裴駰『史記集解』は賈逵を引いて「赤狄之別、隗姓（赤狄の別は、隗姓なり。）」と言う。『國語』鄭語は周の太史の史伯が「北有……潞・洛・泉・徐・蒲（北に……潞・洛・泉・徐・蒲有り）」と言うのを載せ、その韋昭注に「皆赤狄、隗姓也（皆赤狄、隗姓なり。）」とある。諸篇が用いていれる「隗」字は、銅器銘文や古姓によるとすべて「女」を偏とするのが通例であり、実際には「媿」に作るべきである。

淮河中流の北岸、今の安徽省阜陽市の西北にあつた古胡国は、文献では「歸姓」を称している^(注10)。胡は、金文では「鉗」に作り、一九七八年に陝西省武功県任北村の西周銅器窖藏から出土した獸叔簋銘には「獸叔獸姬作伯媿媵簋、……。」とある^(注11)。

この簋は、獸叔夫婦がその長女「伯媿」が外に嫁ぐ際に作成した媵器であり、媵器の銘文の字を称する慣例によると、「伯」は長幼の順序、「媿」は獸國の姓である。

「媿」は古くは「愧」に通じ^(注12)、また借りに「歸」に作り、『戰國策』秦策一「蘇秦始將連横」章の、「狀有歸色」の句の下の高誘注には、「歸當終愧。愧、慚也。音相近、故作歸耳。（帰は当に終に愧ずべし。愧は、慚なり。音相近く、故に帰に作るのみ。）」とある^(注13)。帰姓胡国の「歸」は、実は「媿」の同音の仮借字であり、李學勤氏は銘文に見える媿姓の「鉗」は、「まさしく文献中の帰姓の胡国である」と見なしており^(注14)、これは信じるに値する。

鬼方が媿姓の国あるいは部族である以上、陸終が娶つた鬼方氏の妹は、媿姓の女子に属する。かつて王国維氏は次のように述べている。

『世本』陸終娶鬼方氏之妹，謂之女嬪；《大戴禮·帝繫篇》及《水經注·洧水》條所引作女隣，《漢書·古今人表》作女潁，而《史記·楚世家》索隱與《路史·後紀》所引皆作女嬪，鬼、貴同聲，故餽字亦通作饋，則女嬪、女隣疑亦女媿、女隗之變。……嬪、隣二字其音與媿、隗絕近，其形亦與媿、隗二字變化相同，或殷周間之鬼方已以媿爲姓，作《世本》者因傳之上古也^(注15)。

陳夢家氏は王国維氏の説に同意し、さらに「隣・隗・媿・懷都是鬼姓」（隣・隗・媿・懷はすべて鬼姓である）と推測している（注16）。

女隣・女媿が女隗・女媿の異写である以上、その意味は媿姓の女子であり、すなわち先に引用した『左伝』の「叔隗」・「季隗」、鶡叔簋銘の「伯媿」と近似しており、上古時期の婦の名を国と姓で称すという基本規律を表している。

諸々の記載は陸終が女媿（媿）を娶って六子を生んだと言つており、季連はその最後の一人である。文中の「生」の字は、生みの母と理解でき、また支系の派生と見なすことができるが、どのような解釈であろうと、陸終の六系には一定成分の鬼方氏の血統が備わつており、半姓季連の一系も例外ではない。張正明氏は「鬼方は西北民族であり、後世に隗姓の戎人がいる。隗は媿に通じ、女媿はつまり隗姓の戎人の女とすべきである。このことから、陸終の集落連盟は、同じ鬼方の集落連盟が婚姻を結んで繁栄してきたものであることがわかる。」と述べており（注17）、これは理にかなつていて。

文献中には明確な意見がない。清人の孔広森『大戴礼記補注』に「鬼方、西落鬼戎。宋衷曰、「於漢、則先零羌是也。」（鬼方は、鬼戎に西落す。宋衷曰く、「漢に於いて、則ち先零羌是れなり。」と。）」とあり（注18）、鬼方はすなわち西北に居住していた鬼戎・漢の先零羌であると見なされているが、曖昧ではつきりしない。今、ある学者はこれによつて季連の母族の鬼方氏は西羌集團に属し、半姓であり、また季連の姓は鬼方氏に来源があると推測している（注19）。これについては、羅運還氏がかつて分析して「春秋時代の赤狄、商代の鬼方、季連の母族はみな同一族系であり、……おそらくこれは季連の母族の鬼方氏は西羌集團に属さず、北狄集團に属し、姓は半ではなく媿であることを表している」と述べており（注20）、これは信用できる。しかし、女媿（媿）の族の派系と居住地については、学者はみな言及することが少なく、さらなる分析・検討が待たれる。

二、季連の隗山居住と女媿の来源の分析

「女媿（媿）」は戎狄の族の鬼方氏の出身であり、これは疑いないが、鬼方氏のどの支系に属するのか、当時どこに居住していたのか、ということについては、早期の

清華簡『楚居』には、「季連初降於鄖（隗）山、氐（抵）于空（穴）窮（窮）。」という記載がある（注21）。「初降」には、楚の始祖が天から降りてきたという神秘的な

色彩がある上に、その族がはじめに居住した地の史実背景もあり、『国語』周語上の「昔夏之興也、融降于崇山（昔夏の興るや、融崇山に降る）」の記載と近い。その意味は、半姓の始祖の季連氏は祝融集団から分派した後、はじめに鄖（驃）山一帯に居住していたということである。

「鄖山」はすなわち驃山であり、整理者は『山海經』西山經の「西次三經」が言うところの驃山であると推測しており、この山が「神耆（老）童居之」であるという関係から分析すると、確かに一定の道理はある。しかし、驃山が「三危之山」以西、「天山」以東に位置するという形勢から見ると^{注22}、おおよそ今のが甘粛省の西境に当たり、文献が記載する祝融集団の故墟、すなわち今河南省新鄭から嵩山一帯までは、距離が甚だ遠く、人に疑念を抱かせる。

簡文が記載する季連氏がはじめに居住した驃山は、上古時期の中原の名山の一つである驃山と見なすことができる。『國語』鄭語は鄭の桓公とその大臣の史伯が東遷して災禍を避けることについて議論している時のことと記載し、当時の虢・鄖の地は「主芣・驃而食漆・洧（芣・驃をして漆・洧を食う）」と言い、韋昭注に「芣・驃、山名」とある。すなわち、芣・驃の二山を望

祭の神主としており、西周時期の「驃山」が中原の望山の一つであり、非常に名声があつたことを示している。

『山海經』中山經の「中次七經」には「又東三十里曰大驃之山、其陰多鐵・美玉・青瑩……（又東三十里を大驃之山と曰い、其の陰鉄・美玉・青瑩多く……）」と、その郭璞注に「今滎陽密県有大驃山、……（今の滎陽密県に大驃山有り、……）」とある^{注23}。清人の郝懿行『山海經箋疏』には、「『地理志』云河南郡密有大驃山、潩水所出（『地理志』は河南郡密に大驃山有り、潩水の出づる所なりと云う。）」とある。また、『莊子』徐無鬼に「黃帝將見大隗乎具茨之山、……至於襄城之野、七聖皆迷、無所問途（黃帝は将に大隗を具茨之山に見えんとし、……襄城の野に至りて、七聖皆迷い、途を問う所無し。）」と、唐の成玄英『莊子疏』に「大隗、古之至人也。具茨、山名也、在滎陽密縣界、亦名泰隗山。……今汝州有襄城縣，在泰隗山南、即黃帝訪道之所也（大隗は、古の至人なり。具茨は、山名なり、滎陽密縣の界に在り、亦た泰隗山と名づく。……今汝州に襄城縣有り、泰隗山の南に在り、即ち黃帝の訪道の所なり。）」とある^{注24}。

『漢書』卷八・地理志上に見える河南郡「密」県については、班固の原注に「有大驃山、潩水所出、南至臨穎入穎（大驃山有り、潩水の出づる所にして、南は臨穎に至り

穎に入る)」と、顏師古注に「驃音魄、灤音翼。」と^(注25)、『説文解字』卷二・水部灤条に「水出河南密縣大隗山、南入穎(水は河南密縣大隗山より出で、南は穎に入る)」と^(注26)、『水經注』卷三・灤水篇の経に「灤水出河南密縣大隗山(灤水は河南密縣の大隗山より出づ)」と、注に「大隗、即具茨山也(大隗は、即ち具茨山なり)」とある^(注27)。

この穎山はつまり具茨山であり、また大隗(隗)山・泰隗(隗)山とも呼ばれ、太古の至人の大隗が居住する所として有名であった。それは漢の密県の境に位置し、また襄城と隣接している。

『元和郡縣圖志』卷五の河南府密縣「大隗山」の条に、「在縣東南五十里。本具茨山、黃帝見大隗于具茨之山、故亦謂之大隗山、灤水源出于此(縣の東南五十里に在り。本具茨山、黃帝は大隗を具茨之山に見え、故に亦た之を大隗山と謂い、灤水の源は此より出づ)。」と言ふ^(注28)。『讀史方輿紀要』と『大清一統志』の記載を結合すると^(注29)、唐の密県の東南五十里の大隗山に位置し、今河南密縣・禹県と新鄭の境に接する槐樹嶺・劉堦・史堦などの村一帯であると推測できる^(注30)。密県の境内は、この附近に今は大隗鎮があり、大隗(隗)山の所在と密接に関連すると考えられる。

このことから、半姓季連氏の一系が早期に居住していた「鄖山」(隗山)は、まさにその先祖の祝融がかつて長期的に活動していた今の河南省新鄭と嵩山との間に位置し、またその同族の昆吾・鄖人らの諸支系との距離が遠くないことがわかる^(注31)。この史実の確認は、一連の関連する記載とともに裏付けになるものである^(注32)。

『莊子』の他に、黃帝が大隗に面会する故事は『抱朴子』にも見え、本書内篇卷一三・極言に「昔黃帝生而能言、役使百靈、……之具茨而事大隗、適東岱而奉中黃(昔黃帝は生まれて能く言い、百靈を役使し、……具茨に之きて大隗に事え、東岱に適きて中黃を奉す)。」と言ふ。また卷一八地真に「昔黃帝東到青丘、……北到洪堤、上具茨、見大隗君・黃蓋童子、受神芝圖(昔黃帝は東は青丘に到り、……北は洪堤に到り、具茨に上り、大隗君・黃蓋童子に見え、神芝圖を受く)。」と言う^(注33)。この伝説は古代の道家文献の中に見え、比較的流行していたものであることがわかる。

「大隗」が具茨山に移り住んだことから、具茨山は隗山・大隗(隗)山・泰隗(隗)山とも称される。大隗すなわち大隗・大鬼は、西北鬼方氏の一系が南下してきたものであり、『抱朴子』はそれを「大隗君」と称し、その居住地が「大隗(隗)山」と称されているのはその証

拠であると考えられる。もし大隗が隗山に居住したという故事と筆者の推測とがおおよそ誤つていなければ、氏族社会の晚期に、ある一系の鬼方氏の族人が南に向かつて発展し、黄河を越え、中原の中央に進入し、今の密県・新鄭・禹県の境に接する所の具茨山一帯において活動したことを証明していると考えられる。商周時期に、姓の族人はさらに南に向いて発展し、相次いで淮河上流地区において姓の復・胡・弦の諸国を建立したこと注34、大隗すなわち鬼方の支系が早期に中土に進入し、具茨山一帯において活動したという有力な傍証となるであろう。そうでなければ、これらの人々の群れが西北部から中原を越えて淮河上流に到達するのは難しいことである。

黄帝がわざわざ大隗に面会に行つたかどうか、また神芝図を受けたかどうかなどは、必ずしも確實ではなく、パロディーの成分があると見られる。しかし、黄帝の部族と大隗の一系とは同じ中原の土地について、隣接していたため、互いに交流があつたと考えるのが自然であろう。

鬼方氏の支族の大隗一系がかつて驃（隗）山一帯において活動し、「楚居」が楚の先祖の季連ははじめに驃山に居住していたと言つてゐる以上、両族は同じ一つの比

較的小さな区域範囲内にて、互いの距離は遠くなかった、あるいは互いに隣接していたと考えられる。このようであれば、『大戴礼記』や『世本』などが記載する陸終が娶つた鬼方氏の妹女嬪（隣）は、隣接する大隗の族の出身である可能性があると推測できる。まず、大隗・女嬪（隣）はみな鬼方氏の支系の姓の族人で、同族同姓である。次に、大隗一系は今の密県・新鄭の間の古具茨之山（隗山）一帯において活動し、さらに陸終の族の中心は今的新鄭一帯にあり、両者は互いの距離が約四〇里前後、往来するには近くて便利であり、相互に婚姻関係を結んでいた可能性が高い。もし陸終氏が近きを捨てて遠きを求め、晋陝北部の鬼方氏の中心地域に赴いて婚姻関係を成立させようとするならば、上古の立ち後れた状態と困難な交通条件の下では、想像しがたいものである。のことから、陸終が娶つた鬼方氏の妹女嬪（隣）は、まさしく祝融集團の居住地と隣接する大隗（隣）一系出身の女子であつたと見なすことができる。

陸終の後裔の季連氏として、血縁の角度から言つて、陸終の末子である以上、鬼方氏の後裔（外孫）でもあり、その族がしだいに独立・分家した後、最初にその母族が居住する隗山一帯において活動したのは、頼つたり協力を得たりすることを願つたためであり、これは道理

にかなつてゐる。あるいは、陸終の族人の中の最も年少の一系は、はじめはその母族と同居して成長し、たゞえ独立して家を興し業を立てた後であつても、なお驃山附近において一定期間、活動していたとも考えられ、これが『楚居』の「季連初降於郎（驃）山」の歴史的背景なものかもしれない。

結語

以上の分析の結果、次のことが明らかになつた。

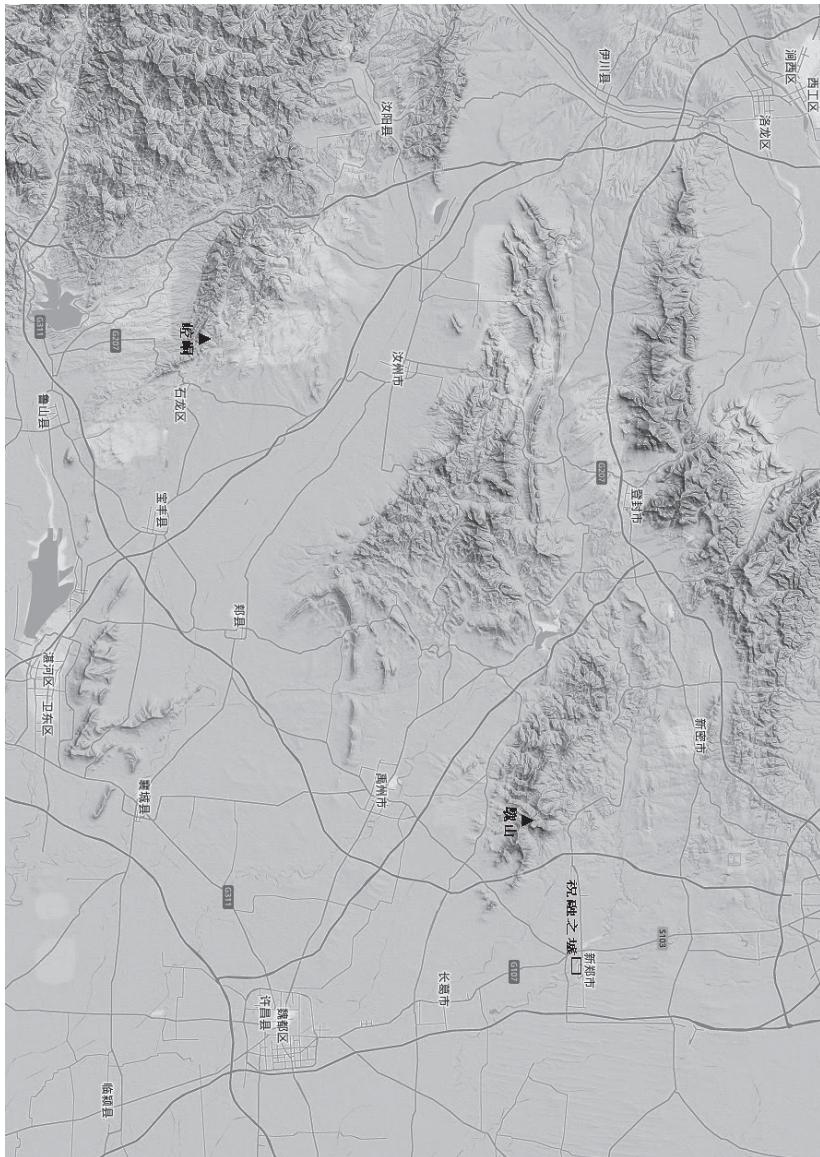
清華簡『楚居』が記載する楚人の先祖季連がはじめに降りた驃山は、今の河南省密県と新鄭・禹県の間の古具茨山に位置し、氏族社会の晩期に鬼方氏の支系の大隗（隗）の族人が南下してこの一帯に居住・活動したため、驃（隗）山・大隗（隗）山、あるいは泰驃（隗）山と呼ばれている。これは上古時期の中原で有名な望山の一つであり、非常に名声があつた（図1参照）。

歴史・地理の角度から推測すると、『大戴礼記』や『世本』などが記載する楚人の遠祖陸終が娶つた鬼方氏の妹女嬪（媿）は、驃（隗）山一帯の大隗の族人の出身であると考えられる。陸終氏が居住する「鄭」（今の河南新鄭）と大隗君が南下後に居住した驃（隗）山とは、

互いの距離が四〇里前後で、近隣であつたため、往来するのに便利であり、相互に婚姻関係を結んでいたと考えるのは十分可能である。

陸終の幼子あるいは比較的遅くに分かれた半姓の季連氏として、長期的に驃（隗）山一帯に居住・活動し、その母族の鬼方氏の大隗（隗）一系とは特に親密で頼りにしている間柄であつたのかもしれない。季連氏と大隗の族系の間のさらに進んだ通婚・融合もまた免れがたいものであると想像できる。このように、季連の族人は祝融八姓中の他の支系と比較すると、戎狄鬼方氏の血統を濃厚に有していることは明らかであり、これは半姓楚人の族系の淵源とその文化の痕跡を探る際に軽視できない要素である。

【図1】季連氏早期居住地位置図



注

- (1) 清華大学出土文献研究与保護中心編・李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』、中西書局、二〇一〇年、原寸大団版、二六〇~二七頁、积文注釈、一八〇~一九四頁。
- (2) 李學勤「論清華簡『楚居』中的古史伝説」、趙平安「試釈『楚居』中的一組地名」、李守奎「根据『楚居』解説史書中熊渠至熊延世序之混乱」(いずれも『中国史研究』二〇一二年第一期掲載) 参照。
- (3) 『史記』、中華書局、一九六二年、一六八九~一六九〇頁。引用文の中の横線は、筆者が加えたものである(以下、同じ)。
- (4) 湖北荊沙鉄路考古隊『包山楚簡』第二一七簡、文物出版社、一九九一年、三四頁参照。このほか、第二三三七簡にも見える。
- (5) 王聘珍『大戴礼記解詁』卷七・帝繫、中華書局、一九八三年、一二七~一二九頁。
- (6) 『史記』、一六八九頁。
- (7) 『太平御覽』卷一三五「顓頊妃」条引『世本』、中華書局、一九六〇年、六五五頁。
- (8) 『史記』、一六九〇頁。『太平御覽』卷三七一「脅」条引『世本』、一七二二頁。
- (9) 王國維「鬼方昆夷獮狁考」(『觀堂集林』掲載、中華書局、一九五九年、五八三~六〇六頁)、陳夢家『殷墟卜辞綜述』、第八章第五節四「鬼方」(中華書局、一九八八年、二七五頁) 参照。
- (10) 『史記』卷三六・陳杞世家、司馬貞『史記索隱』引『世本』、一五八二頁。王符著、汪繼培箋『潛夫論箋』卷九・志氏姓、中華書局、一九七九年、四五六頁。
- (11) 盧連成・羅英傑『陝西武功県出土楚簋諸器』(『考古』一九八一年第二期) 参照。
- (12) 『漢書』卷四 文帝紀に「以不敏不明而久撫臨天下、朕甚自愧」とあり、顏師古注に「愧、古愧字。」とある(中華書局、一九六二年、一二六頁)。
- (13) 『戰國策』、上海古籍出版社、一九八五年、八六頁。
- (14) 李學勤「從新出青銅器看長江下游文化的發展」、『文物』一九八〇年第八期。
- (15) 王國維「鬼方昆夷獮狁考」、『觀堂集林』掲載、中華書局、五九一~五九三頁。
- (16) 陳夢家『殷墟卜辭綜述』、二七五頁。
- (17) 張正明『楚史』、湖北教育出版社、一九九五年、二一頁。
- (18) 孔広森『大戴礼記補注』、中華書局、二〇一三年、一三八頁。
- (19) 一之「楚人源於羌族考」、『青海民族学院学報』一九八一年第一期。趙炳清「楚人先民溯源略論」(『民族研究』二〇〇五年第一期) にも同様の見解がある。

- (20) 羅運還『楚國八百年』、武漢大學出版社、一九九二年、四六頁。
- (21) 清華大學出土文献研究與保護中心編・李學勤主編『清華大學藏戰國竹簡(壹)』、中西書局、二〇一〇年、原寸大圖版、二六〇~二七頁、糸文注釈、一八〇〇~一九四頁。
- (22) 郝懿行『山海經箋疏』卷二・西山經、中國書店、一九九一年影印本、二七〇~二八頁參照。
- (23) 郝懿行『山海經箋疏』卷五・中山經、二八頁。
- (24) 郭慶藩『莊子集成』、『諸子集成』第三冊收錄、中華書局、一九五四年、三五九~三六〇頁參照。
- (25) 『漢書』、中華書局、一九六二年、一五五六~一五五七頁。
- (26) 『說文解字』、中華書局、一九六三年、二三二五頁。
- (27) 『水經注』、上海古籍出版社、一九九〇年、四二八頁。
- (28) 『元和郡縣圖志』、中華書局、一九八三年、一三五頁。
- (29) 『說史方輿紀要』卷四七、開封府新鄭縣「大驥山」條、中華書局、二〇〇五年、二二七~二頁、および『嘉慶重修一統志』卷一八六、開封府山川「大驥山」條、中華書局、一九八六年、九一四五頁參照。
- (30) 『河南省分縣地圖冊』(内部用)、河南省測繪局編繪印刷、一九八二年、五五〇~五六頁、五七〇~五八頁參照。
- (31) 昆吾・鄒人の諸支系の居地については、詳細は拙稿「論祝融八姓の流変与分布」、湖北省考古學會選編『湖北省考古學會論文選集』(三)、『江漢考古』増刊、一九九八年、一二二~一

三九頁参照。

- (32) 季連と驥山との関係については、拙稿「季連早期居地及相關問題考析」、『清華簡研究』第一輯掲載、中西書局、二〇一二年、二七七~二八七頁參照。

- (33) 『抱朴子』、『諸子集成』第八冊收錄、中華書局、一九五四年、五七頁、九二〇~九三頁。

- (34) 詳細は、拙稿「復國与楚復興考析」、『中央研究院歷史語言研究所集刊』第八〇卷第二号(二〇〇九年)、一九七〇二二六頁參照。

[附記]本稿は、二〇一五年一〇月一六日・一七日に開催された「出土文献与先秦經史國際學術研討會」(香港大學中文學院主催、香港中文大學歷史系中國歷史研究中心共催、於香港大學百周年校園)、および二〇一五年一一月二三日に開催された中國出土學研究会の座談会(於大阪大學中國哲學資料室)で発表した論文(原題「從『楚居』析陸終娶鬼方氏妹女嬪之伝説」)に若干の修訂を加え、日本語に翻訳したものである。座談会の開催と『中國研究集刊』への寄稿をご提案くださった湯浅邦弘教授(大阪大學)、通訳・翻訳を務めていただいた草野友子博士(京都産業大學)をはじめとする関係者各位に対し、ここに感謝申し上げたい。

本稿は、國家社科基金重大招標項「周代漢淮地區列國青銅

器和歴史・地理綜合整理与研究」（批准号：15ZDB032）、および武漢大学重大委托項目「兩周漢淮地区列国青銅器和歴史地理探析」（二〇一六年）の段階的成果である。